

令和5年12月号

一宮町の歴史特集 — 加納久朗没後60年 —

ワレワレハ千葉県ノタメ

千葉県八日本ノタメ

日本八世界ノタメ



【第9回 東京湾埋立計画】

戦後の久朗の活動の特筆すべき点として「東京湾埋立計画」の提案があります。

戦後復興を成し遂げ、急速に経済が発展していく日本では、東京へ人口が集中、土地や住宅の不足が問題となっていました。日本住宅公団もこのような時代背景を受けて設立されたもので、その難しい舵取りを任されたのが久朗でした。

国内では公団により多くの土地（農地）が開発され、住宅が建設されました。その一方で、開発に対する反対運動が起こり、工事が強行される地域（松戸など）もあつたのです。

このような問題の中で久朗が思い描いたのが「東京湾埋立計画」です。昭和33年（1958）に発表された久朗の考えは通称「加納構想」と呼ばれ、翌年の産業計画会議の第7次勧告「東京湾2億坪埋立についての勧告」により世間に知られるようになります。これが通称「ネオ・トウ

令和6年1月号

一宮町の歴史特集 — 加納久朗没後60年 —

ワレワレハ千葉県ノタメ

千葉県八日本ノタメ

日本八世界ノタメ



【第10回 特別寄稿

加納知事登場を喜んだ歌人】

加納久朗知事の登場を大いに喜んだひとりには、佐藤賢司（1889〜1964）がいました。千葉県睦村佐山（現八千代市）に生まれ、県立千葉中学校（現県立千葉高校）を卒業し、陸軍士官学校、早稲田大学で学び、東京帝国大学（現東京大学）で西洋史を専攻した歴史学者です。陸軍幼年学校教官などを経て、長く駒澤大学教授を務めました。

佐藤は歌人でもあり、生涯に十萬首の歌を作るといふ誓願を立て、歌作に励みました。遺歌集に『山雉子』（1965年）があります。千葉市花見川区花園に住んだこともあつて、その歌を通じて戦後から高度成長期の千葉県内の様子を知ることができま

す。次の三首は、加納の千葉県知事選当選の報に接して、昭和37年（1962）10月29日に詠んだ歌です『山雉子』より。

七十六翁なれども加納氏は

一期つとめて大業なさむ

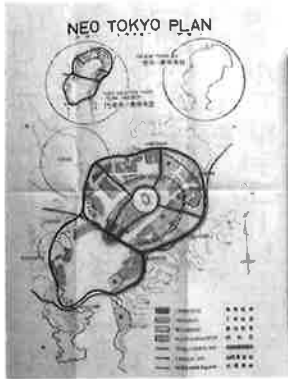
大いなるロマンティスト加納氏は

リヤリストなる手腕を示せる

干拓と教育と道路本県は

目をそばだてて新知事待つ

住宅公団総裁などを歴任し、「アイデアマン」として名高かつた加納久朗が、すぐれた行政手腕を発揮することへの大きな期待が表れています。



▲ネオ・トウキョウ・プラン図（個人所蔵）



▲佐藤賢司（『山雉子』より転載）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (一宮町史編さん委員 外山信司)